

平成27年度 第3回企画展（8月1日（土）～10月4日（日））

さわだしげじ
「生涯一陶工—沢田重治—」展

沢田重治は、明治39（1906）年、江戸時代から7代続く窯元「丸四（まるし）」の長男として生まれた。生前の沢田を知る人によれば、明治生まれの気骨さ溢れる人物で、髪を一度も伸ばしたこともなかったという。どこへ行くにも常にトレードマークであったハンチング帽に黒の上掛けと前掛け、白いシャツと地下足袋の格好であった。その流行を追わない真面目な性格が示すとおり、沢田は14歳の時に常滑高等小学校を卒業すると同時に家業であった製陶業を継いで、甕や壺などの大物造り一筋に70年作り続けることとなった。

「丸四」の窯は明治45（1912）年に刊行された『常滑陶器誌』によると、壹號備前窯（いちごうびぜんがま）、貳號（にごう）備前窯と2つの窯を所有している。窯はどちらも壺や甕などの大物を焼成する素焼窯と呼ばれた単室の薪窯で、江戸時代から続く窯の構造である。

沢田は昭和44（1969）年に製陶業を長男に譲ると、より一層大物造りに専念していった。沢田の壺や甕の魅力は「ヨリコ造り」と呼ばれる成形技法である。これは太さ7～10cmの粘土棒（紐）を肩に担ぎ、自分がロクロのように回りながら粘土を積み上げていく技法である。その始まりは平安時代末期にまでさかのぼり、沢田が受け継いだ伝統は、今も常滑に息づいている。

沢田は「作品は、どれだけ作っても満足するものはなく、生涯が修行」、「これまでの人生でごまかしたこともなく、人をだましたこともなく、本当に正直に生きてきた」と語っている。沢田にとって大物造りは人生そのものであり、「今では買い手もいない。しかし、無心に大物を作り続ける」と語り、その儲けとは無縁な作陶スタイルは、逆に人の心を惹きつけることになった。生前、福田赳夫元首相や元プロ野球選手・監督の王貞治といった著名人が沢田の大壺を購入したというのが自慢であったという。また、中世の壺をアレンジした作品や、昭和56（1981）年に直径2m3cm、重さ450kgの伝統技法を生かした大皿造りは伝統技法の限界に挑戦した取り組みでもあり、沢田の「生涯一陶工」という言葉に恥じない努力を惜しまぬ気骨さと誇りが感じられる。

沢田は昭和57（1982）年、76歳の時に常滑市指定無形文化財の技術保持者として認定された。晩年、沢田は「自分が死んだら自分が作った壺は割って捨ててほしい」、「いつまでも年寄りに（壺を）作らせるな」と語っていたという。それは職人氣質であった沢田だからこそその重みを持つ言葉であったと同時に、常滑の伝統から引き出される新たな可能性を次世代にみていた言葉であったのかもしれない。平成11（1999）年、92歳で鬼籍に入る。



灰釉多口瓶



灰釉突帯長頸大壺



灰釉三耳壺



焼締め瓢箪形大壺